

# 子規會誌

一四二号

平成二十六年  
四月

子規の俳論とその後 ..... 平岡 英 : 一

子規五友の一人 森知之の生涯 ..... 佐伯 健 : 一二

子規の用いた松山言葉 ..... 忽那 哲 : 二五

# 例会 記録

## ○平成二六年一月例会(第八五二回)

一月一九日(日) 石手公民館 出席者三三名

新年懇親会

・年頭挨拶

松山子規会会長 井手 康夫

副会長 和田 克司

・夢想神伝流居合演武

愛媛県剣道連盟

居合部会会長 森 慎吾

・子規漢詩朗読

吟道明教館本部相談役 杉本 弘

同 副会長 武田 峰松

松山子規会理事 福井みどり

同 竹田 美喜

・民謡

・謡

## ○平成二六年二月例会(第八五三回)

二月一九日(水) 正宗寺本堂 出席者二八名

講演「安倍能成の子規観」

副会長 今村 威

安倍能成の昭和二六年子規五十年祭記念講演「人間としての

正岡子規」に基づき、「安倍能成は終生松山人の氣質が抜けな

かった。それだけに子規に対して、松山人同士としての親し

みを持っていた。特に『病牀六尺』をはじめとする晩年の随筆に、

子規の文学の真実なるものを見出し、その真実なるが故に、松

山を超えて日本的になったと述べ、やがて世界的になるであら

うと、子言している」との趣旨で、子規と真正面から向き合っ

た能成の子規論を紹介。能成の生の声の録音等多くの資料に拠

り、その数多くの経歴活躍を紹介しつつ、子規及び能成への敬愛の情に溢れた講演であった。

## ○平成二六年三月例会(第八五四回)

三月一九日(水) 正宗寺本堂 出席者三五名

講演「伊予北条(風早) 地方について

〜粟井坂付近を中心に〜」

理事 高橋 俊夫

幼時を過ごした北条地区の粟井坂近辺について、その歴史と

文学を中心に、名所旧跡、句碑歌碑等に触れつつ、追懐の情を

込めて語られた。資料として、大原観山筆の写本「遊鹿島記」、

虚子「露のわれ」、近藤元脩「粟井坂新道碑」の草稿等を効果

的に引用し、地区内を隈なく歩いて写した画像を活かして興

味深く紹介。子規の句「涼しさや馬も海向く淡井阪」の「淡井

阪」の語を丹念に考証。地元の文学や歴史を貴ぶ地域の人々の

心情を述べ、子規・極堂・漱石生誕150年についても熱意を

込めて提言された。

# 例会 案内

## ○五月例会 平成二六年五月一九日(月)

正宗寺本堂

卓話「子規旧居間取り図について」

会員 中野匡子

講演「なじみ集」について」

副会長 和田克司

## ○六月例会 平成二六年六月一九日(木)

正宗寺本堂

講演「続 岐蘇雜詩三十首」

常任理事 高川武彦

## ○七月例会 平成二六年七月一九日(土)

正宗寺本堂

講演「子規の批評眼―選句のあり方について―」

愛媛大学准教授 青木亮人氏

## 子規の俳論とその後

### (一) 俳句分類から猿蓑へ

正岡子規は明治十六年上京のあと、隔年に帰郷をしている。明治十八年の帰郷の際には井手真禎に和歌を学び、二十年には大原其戎に旧派の俳句を学んだ。

明治二十二年は咯血のため帰省して静養をしている。

子規は何事にもまず先進に問いただして歩を運んでいく。子規は資料の収集、分類、整理、記録を好んだこと知られている。それは明治二十三年の「富士のよせ書」明治二十四年の「かさねこと葉」などに表れている。

分類、記録は学術研究の基礎であるが、広範囲な百科事典的な仕事には子規の編集者、ジャーナリストとしての顔ものぞいている。

子規の行った独自の事業として特筆すべきことは「俳句分類」に着手したことである。

子規は俳句分類を行い先人の業績を見ることで、俳句革新の必要性を確信し、自らは新俳句の俳人としての力をつ

### 会費納入についてお願い

会誌（第一四〇号）の送付で平成二十五年度の会誌の発送は終了いたしました。

つきましては、年会費の納入ご協力についてお願い申し上げます。松山子規会は皆様の会費で運営いたしております。会の運営の円滑を期するためにも改めてご協力をお願いする次第であります。

すでにご入金下さっている方も沢山いらっしゃいますが、一四〇号で会費切れとなる方には本誌に振替用紙を同封させていただきましたので、納入につきよろしくお願い致します。

平成二十六年度会費（二十六年四月～二十七年三月）

年会費 三、〇〇〇円

尚お問い合わせなどについては事務局 蔦川武彦までご連絡下さい。（〇八九一九七六―六四三三）

松山子規会

## 子規の俳論とその後

平岡 英

### (一) 俳句分類から猿蓑へ

正岡子規は明治十六年上京のあと、隔年に帰郷をしてゐる。明治十八年の帰郷の際には井手真禎に和歌を学び、二十年には大原其戎に旧派の俳句を学んだ。

明治二十二年は咯血のため帰省して静養をしている。

子規は何事にもまず先進に問いただして歩を運んでゐる。子規は資料の収集、分類、整理、記録を好んだことでは知られている。それは明治二十三年の「富士のよせ書」明治二十四年の「かさねこと葉」などに表れている。

分類、記録は学術研究の基礎であるが、広範囲な百科事典的な仕事には子規の編集者、ジャーナリストとしての顔ものぞいている。

子規の行った独自の事業として特筆すべきことは「俳句分類」に着手したことである。

子規は俳句分類を行い先人の業績を見ることで、俳句革新の必要性を確信し、自らは新俳句の俳人としての力をつ

けていった。

子規は俳句の歴史を知ること革新を志し、古俳句の分類を行うことで俳人となったといえる。

「自分が俳句に熱心になった事の始りは趣味の上からよりも寧ろ理屈の上から来た原因が多く影響してをる。其は「俳句分類」といふ書物を編纂せうと思ひついた為に非常に熱心になり始めた。」(獺祭書屋俳句帳抄上巻を出版するに就きて思ひつきたる所をいふ)(明治二十五年)

子規は俳句分類を行うについては図書館を利用するともに、俳諧の参考書を自ら収集した。

現在の子規庵は家具もなく広々としているが、子規在世中は、部屋の周囲には蔵書が積み上げられ、その号のごとく獺祭書屋であったのである。

子規の俳句分類の研究は、連歌から始まり元禄の七部集で目を開くことになる。

「はじめに「猿蓑」を繙いた時には一句一句皆面白いやうに思はれて嬉しくてたまらなかつた。これが自分が俳句に

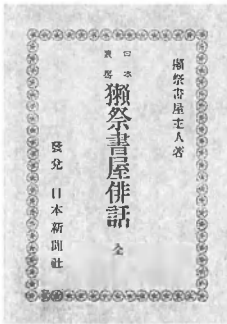
於ける進歩の第一歩であった。」(獺祭書屋俳句帳抄上巻を出版するに就きて思ひつきたる所をいふ)(明治二十五年) 猿蓑は芭蕉の「初しぐれ猿も小蓑をほしげ也」から始まり(巻の一冬)、巻の四(春)には芭蕉の「行く春を近江の人と惜しみけり」がある。巻の五が「歌仙」巻の六が「幻住庵記」から成り立っている。

## (二) 俳諧大要まで

明治二十五年、子規は小説「月の都」を脱稿し幸田露伴に批評を求めるが結果が芳しくなく、小説家を断念し詩人となることを決意する。

早速同年二十五年六月から十月にかけて新聞日本に「獺祭書屋俳話」を連載している。

その中で俳句は明治年間には尽きるとし、「余は更に和歌俳句の外に一種の新詩歌を創造することを熱望するものなり」とする。



明治二十六年五月刊

九月増補再版

明治二十六年は芭蕉翁二百年忌に当る。同年に「芭蕉雜談」を書いた子規はそのことを意識していたであろう。芭蕉の名の大きさについて、子規は俳諧の性質が平民的であるからであるとす。平民的とは俗語を嫌わないこと、句の内容が簡潔であることである。

ただ世評が芭蕉を完全無欠として神聖視するようになっていることを子規は批判する。

「その様恰も宗教の信者が経文の意義を解せず理不理を窮めず単に有難し勿体なしと思へるが如し。」(文学漫言)

子規は芭蕉の句を次のように見ている。

「芭蕉作る所の俳句一千余種にして僅かに可なる者二百余種に過ぎずとせば比率は僅かに五分の一に当れり。……然れども単に其句の数のみ検すればひとりにして二百の多きに及ぶ者古来稀なる所にして芭蕉又一大文学者たるを失わず」と評価している。

子規は、文学の中で最も高尚な種類で日本で欠けているのは雄渾豪壯の要素であるが、芭蕉独りが面目を一新しているとする。

そして芭蕉の「夏草やつはものどもが夢のあと」「五月雨をあつめて早し最上川」などを例示している。

獺祭書屋俳話の最後に、のちに話題となる、「或問」に対する子規の言がある。

「発句は文学なり。連俳は文学に非ず。」

「連俳に貴ぶ所は変化なり。変化はすなわち文学以外の分子なり。」

「上半下半を共有するは連俳の特質にして感情よりも知識に属する者多し」

連句は文学ではないとの子規の言は、旧派の平凡陳腐な俗調を打破し、発句の独立を更に強める目的があつたためであらう。

獺祭書屋俳話は俳句革新の第一声とされるが、子規以前から秋声会などの新俳句の動きはあり、俳壇に直ちに影響を及ぼしたものではない。ただ椎の友社の伊藤松宇との交流が始まるなど、俳壇に一石を投じている。

明治二十七年三月に、子規は浅井忠を介して中村不折と会い、絵画の写生を聞く。実景を重んずることは従来からあつたが、子規の俳句革新にとつて「写生」は新しい意味を持つていた。

二十八年の日清戦争の従軍の際も子規は実地での吟詠に力を入れている。

遼東半島から帰国の船中で大咯血をした子規は五月二十三日に神戸病院に入院した。

須磨保養院を経て八月二十日には退院するが、この間七月中には俳句草稿「病余漫吟」の編集を始め、七月二十五

日の虚子の東京への出立の後は「養痾雜記」を執筆している。

八月二十五日には松山へ帰り、二十七日には夏目金之助(漱石)の愚陀仏庵に入る。

愚陀仏庵での日中は漱石は松山中学へ出勤し、子規に教えを乞う松風会員もそれぞれの仕事についている。残された子規には一人だけの思索と執筆の時間があつた。その際に取りかかったのが、「俳諧大要」である。



明治二十八年連載  
明治三十二年一月刊

「俳諧大要」は「日本」に明治二十八年十月二十二日から連載された。次は虚子識の序文である

「子規子痾を戦地に得帰つて神戸の病院にあること數句転じて須磨に遊びやや癒えて故山に帰り漱石の家に寄寓す極堂等松風会員諸氏朝暮出入りして俳を談じ句を闘す時に明治二十八年秋俳諧大要は当時に成るものにして嘗て新聞日本に連載せらるこれ子規子進歩の径路を叙したるものに

してまた同人進歩の徑路を叙したるもの即ち俳諧の大道なり  
り輯めて一卷となし俳諧叢書第一篇に收むる所以なり」

俳諧大要の第一に掲げられているのは、俳句は文学の一部であるとの宣言である。つまり当時は必ずしも俳句は文学の一部とは認められていなかったのである。

「俳句は文学の一部なり文学は美術の一部なり故に美の標準は文学の標準なり文学の標準は俳句の標準なり」

俳句の種類としては意匠と言語(心と姿)をあげている。「意匠に勁健、壮大、細織、雅撲、婉麗、幽遠、平易、莊重、輕快、奇警、淡泊、複雑、單純、真面目、滑稽、突梯なるあり其他區別し来れば千種万様あるべし」

これらの評語は子規の分類好きの現れの一つで、子規の「評語集録」には一字から八字までの評語を集めている。

次に作句の要点として「空想より得たる句は最美ならざれば最拙なり 実景を写して最美なるは猶得難けれど第二流位の句は尤も得易し」とある。実景の写生をすれば二流位にはなると云うのは、それが初心者には無難であるということである。俳句の修学の順序を説いたあとに、唐突に俳諧連歌の説明をしている。

子規は前述のごとく獺祭書屋俳話において「連句は文学ではない」と言い切っているが、それから三年後に俳諧連

歌の説明を附けるのは、連句を無視することは出来ないと考えたからであろう。

### (三) 虚子・碧梧桐による継承

「俳諧大要」と時を同じくして、虚子は明治二十八年十月から雑誌「日本人」に「俳話」を連載した。「日本人」は新聞日本の僚誌と云えるもので、月二回刊の総合雑誌である。連載は陸羯南の紹介によるもので、虚子にとっては活字になった初の文章であった。「日本人」は「日本」とともに時の政府の政策に反論することが多く、論陣には三宅雪嶺(主幹)、杉浦重剛、井上田了らがいた。



明治二十八年十月より  
虚子「俳話」連載

虚子は発表した「俳話」を中心にして「俳句入門」と題した冊子にまとめた。文初は次の問いかけから始まる。

「元祿に興隆して享保に衰微し  
天明に再燃して天保に墜落し

明治に至りて更に復活せんとする俳句とは如何なるものか

虚子は「俳句は十七字に限られたる詩なり」「俳句は天然物を詠せんとする」と答える。また俳句終末論についても、反論をしている。

「或曰俳句は將に滅ぶべしと。これ愚論なり。」

天地山川草木の傍に見て造化が吾人に与へたる詩材は未だ尽きず。故人の名句寥寥のみ。不磨の句として千歳に伝ふべきものは元禄天明に於ける少数のみ。」

句材は天地に尽きることではなく、名句といえるものは少数であるといっている。

虚子は卷末の「明治の俳人」の項で率直な問題提起をしている。

「時間（歴史）を離れて見んか芭蕉、其角、去来なるものあり蕪村、曉台、白雄なるものあり 明治の俳壇の要すべきは、芭蕉、蕪村に非ざる一大偉人たることを」と明治に芭蕉、蕪村に続く偉人の出現を期待している。

「先ず余が第一の希望は

一、歴史的研究 如何なる事情によりて盛衰し今日に至りたるか

二、俳句の文学における地位 俳句は果して他の文学の配下に属するに止まるか 俳句を知らざるものをして安直文學の名を為さしむること勿れ

三、出来得るだけ雑多の句を詠出すること 諸種の句を詠ずるに足るべき技量を具ふる

四、俳諧の未来を研究し予言する責は吾人の双肩にあり 何故に俳諧は腐朽せんとするか 俳句は果たして殆んど死文學に属せんとするか

(二)で俳句が、他の文学の下にあり、安直文學と言われていることを述べ、(三)では五七五の俳句は文学として領域が狭い、という評価に対抗するために、幅広く詠む技量が求められると云っている。

(四)では何故に俳句は朽ちているのか、死文學の範囲に入るのか、と懸念に問いかけているのである。

当時の俳句に対する評価はこのようなものであった。子規は勿論この事を理解してはいるが口にはしていない。子規は志を持ち新俳句の目標を高く掲げていた。虚子の立場だからこそ、この現実の有様を述べる事ができたのである。当時虚子は二十一才である。

日暮里の道灌山は、筑波山の見える江戸時代からの景勝地で、山上には茶店があった。

明治二十七年のことと思われるが、子規と虚子が道灌山の茶店で休んでいる時に「段々夕暮れになってきて茶店の下の崖には夕顔の花がしろしろと咲き始めた。」子規は、「今親しく此夕顔の花を見ると以前の空想的の感じは全く

消え去りて新しい写生的の趣味が独り頭を支配するようになる。」と説いた。しかし虚子には「以前の空想的の感じが全く消え去る」といふことに就いては少なからず不安と不平の情とを禁じ得なかつた。「併し子規子の決論は斯うであつた。其は仕方が無い。写生趣味の上に立脚する以上は自然の結果として空想趣味を排斥せねばならぬやうになる。一方では甚だ殺風景な感じがするが、その代わり一方ではまだ古人の知らぬ新たならしい趣味を見出すことが出来るではないか。」と。しかし虚子には「其子規子の心持もよく了解せられていたのではあるが、」納得できないものが残つた。

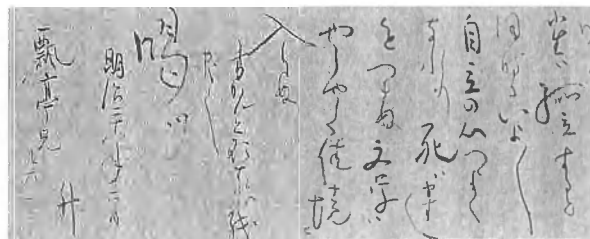
(ホトトギス(以下ホ誌とする)七巻六号俳話)  
写生についての子規と虚子の受け止め方の微妙な違いの分かる挿話である。

この道灌山で翌年二十八年十二月九日に有名な子規と虚子の対談が行われ、子規の要請に対して虚子は後継となることを断つてゐる。

その内容については子規の五百木良三(飄亭)宛の約三百四十行にわたる膨大な書簡で知ることが出来る。

「小生は今日口今一人となき一子を失ひ申候。・・・最早小生の事業は小生一代の者に相成候。・・・」

「小生は纔(わず)かに創業の功を奏したる俳句類題全集とともに其運命の短きを歎じ申候」



書簡の終りの部分であるが、大きい「喝」に子規の懸命の思いを知ることが出来る。

小生は孤立すると

同時にいよいよ

自立の心つよく

なれり 死はますます

近きぬ 文学は

やうやく佳境に

入りぬ

書かんと欲すれば紙尽く

喝ッ

(平成二十五年第四十八回明治古典会七夕古書入札会)所収  
画像)

「明治二十九年の俳句界」(明治三十年一月「日本」連載)において子規は前年に比して俳句は著しく進歩したとし、碧梧桐の印象明瞭、虚子の時間的俳句、人事句を挙げる。「虚子碧梧桐が多少の新機軸を出したのは「古来在りふれた俳句に飽きて、陳腐ならぬ新趣向を得んと渴望せし結果な

るべし」と子規は云っている。

虚碧に続いて内藤鳴雪、石井露月、佐藤紅緑、村上霽月、夏目漱石、柳原極堂らをあげて子規は克明な評を行っている。それは明治二十九年に止まらない一大俳論となっている。



明治三十年、三十一年  
「日本」、「赤誌」連載  
明治三十二年刊

子規は俳句分類を行う中で、散在する蕪村の句に着目していた。

「蕪村の俳句は芭蕉に匹敵すべく、或は之に凌駕する処ありて、却つて名譽を得ざりしものは主として其句の平民的ならざりしと蕪村以後の俳人の尽く無学無識なるとに因れり。」子規周辺が蕪村を見出し賞揚したことにより子規派は蕪村派とも言われるようになる。

「芭蕉死後百年に垂んとして始めて蕪村は現れたり。彼は天命を追ふて俳諧壇上に立てり。」と子規は云う。

何も書き加えなくても絵となる点において、蕪村の句はそれ以前の句よりも客観的であると見る。

「天然は簡單なり。人事は複雑なり。天然は沈黙し人事は活動す。」

身に入むや亡妻の櫛を闇に踏む

御手討ちの夫婦なりしを更衣

蕪村

一句目はまことに身にしむ句である。二句目は例えば小姓と腰元などの仲で御手討ちになるはずであった二人が、生きながらえて衣更えをしている。との意で人事の奥深い経過をを詠んでおり、蕪村は芭蕉を超えていると子規はいう。

既述のごとく子規は芭蕉の佳句はその五分の一としたが、蕪村については千句尽くが佳句であるという。多作とされる蕪村が自選を厳しくしたせいでもある。

子規は俳句の美を実験的理想的の二種に分けている。

「此種の理想は實際あり得べからざることを詠みたるもの是なり。この種の理想は今人にして古代の事物を詠み、未だ行かざる地の景色風俗を写し、曾て見ざる或る社会に情状を描き出す者はなり。」

子規が蕪村の理想句に惹かれるのは、子規自身が病のため外出が不自由になり、写生の幅がせまくなったことも影響しているとみられる。

俳諧三佳書の序で子規は芭蕉と蕪村の比較をしている。

(芭蕉) 消極的 質素 静か 梅 杜若 (元禄)  
(蕪村) 積極的 華美 動く 桜 牡丹 (天明)

碧梧桐は明治三十五年に「俳句初歩」を著した。

まず俳句と作法書について「世間には俳句の作法を教える書物が沢山あるが、杓子定規や規則第何条やのないところが即ち文学美術の生命であるのだ。」とする。

次に叙景の心得として「俳句は細小機微、平淡單純簡潔なる事物を詠するに通ずる詩形であつて、又それを詠ずべき使命を全うするといふに満足すべきではあるまいか。」とこのように説いている。のちに新傾向俳句を唱える碧梧桐の言葉として興味深い。

#### (四) 碧虚の相違と連句

子規は明治三十五年九月十九日に没する。

明治三十六年のホ誌十月号で、虚子は碧梧桐の温泉百句から「温泉の宿に馬の子飼へり蠅の声」について、「蠅の声の調和が悪い、今少し感じの良いものを配したらよからう」と批評した。

これに対し翌月号で碧梧桐が「その儘を句にしたので、これほど平凡で無骨な言い方はないと思うていた」と反論した。

のちにこの事が碧虚の不仲の始まりと見る説があるが、

碧虚の資質の異なることは、「明治二十九年の俳句界」でもすでに子規が指摘しているところである。碧梧桐は写生趣味を主とし、見えていないものの配合にも反対している。

一方、虚子は空想趣味、理想趣味で道灌山の夕顔の挿話にも表れている様に閑寂で東洋的美を好んだ。

俳句に対する処し方が異なるとはいえ、両者の交際は以後も続いている。

蕪村派である子規の二面を碧虚はそれぞれ引き継いだと云える。

虚子は俳句が復興した明治の文壇で多少疑問が残されているものは連句であると考えていた。

子規が「獺祭書屋俳話」で唱えた連句非文学論への疑問である。

「俳体詩—稍連句を変化させた—新詩体を創めて見るのも善からうと思うと漱石子にいふと、漱石子は、それは善からう、俳体詩とでもいふものか、」(ホ誌七卷十一号)

虚子は漱石と語り合つて「尼」二十四句を試みている。

女郎花女は尼になりにけり 虚子

弦の切れたる琴に音もなく 漱石 (後略)

こういう虚子と漱石の遊びのある句作が、のちの漱石の「吾輩は猫である」を生む源となつたともみられる。

虚子は明治三十九年九月に「連句論」を発表し、小説が一本の織維とすれば、連句は植物の茎の横断面を見るようなものであり、連句も人に面白く読ませるところは文学ではないかとする。

## (五) 新傾向俳句とその後

思はずもヒヨコ生れぬ冬薔薇 碧梧桐

碧梧桐の門下である大須賀乙字（明治十四年1881～大正九年1920）は明治四十二年に「俳句界の新傾向」を発表してこの句を取り上げた。そして表現法がこれまでの直叙法、活現法から暗示法に変わっていると見ている。

一見無関係に見える「ヒヨコ生れぬ」と「冬薔薇」に感上の類似の点を見出している。

乙字は「日本俳句の近来の傾向は、季題と他の部分との関係が暗示的でまた極めて複雑あること、即ち季題の新しき感想を発見して大胆に縦横に描出してをる点にある。」と述べる。

碧梧桐は、乙字の意見に対し概ね賛成し「新傾向概論」で次のように述べる

「階級制度が取り去られ、压制思想が、自由思想と轉換した今日、俳句が依然として旧態を保つというのは不自然である。

俳句の新傾向はここに生まれる。俳句の歴史あつて以来

の大変革—革命—というのも、この所以である。換言すれば新旧思想衝突の過渡時代である。」

（明治四十三年三月二十五日。肥前長崎にて）  
全国「三千里」の周遊をしていた碧梧桐は明治四十三年十一月十四日に安芸竹原（広島）に於いて「無中心論」を述べる。

中塚響也の「雨の花野来しが母屋に長居せり」この句が「一日の出来事のある部分を取り出して、それを偽らずに叙した所に興味を感ずるのである。」と碧梧桐は云う。

「明瞭な中心点を作ろうとすれば、自然を偽らねば出来ぬ場合がある。」その破壊的であると考へらるる処に、新たな生命の存することを思わねばならぬ」としている。

萩原井泉水は「俳壇最近の傾向を論ず」の中で新傾向について次のように述べている。

「子規子の革命が写生主義の唱導の外に短命なるがために復興的以上の事績を挙げることが出来なかつた。」

「この時の所謂新傾向なるものは之に反して他の反面の復興を企てたものと見るべきである。従つて子規子の革命に対する補充的意味のものであるとも云うことが出来る。」

しかしやがて新傾向派の人々の間には種々の異なる意見が出て分裂状態となる。

乙字は自然を偽らない芸術があるだろうか云い、中塚

一碧楼は無季俳句、自由律俳句を唱える。萩原井泉水は型を破つて自然に帰れ、俳句は季題を離れて存立し得る。という。

碧梧桐は幾つかの俳誌に拘りながら、いづれも永続せず巡歴をしていくことになる。

○「層雲」明治四十四年（井泉水）

○「海紅」大正四年三月（中塚一碧楼）

○「碧」大正十二年（碧梧桐）

○「三昧」大正十四年三月（風間直得）

山椒魚活けん箱を七日路旅程たびがな 碧梧桐

碧梧桐は遂にはルビ句を詠むようになり、自らの作を俳句ではなく詩であると云う。

そして還暦の昭和八年には俳壇からの引退を表明する。この間、碧梧桐は書家としても知られた存在であった。

盟友の虚子は、碧梧桐の行動が俳句の破壊になるのではないかと早くから危ぶんでいた。

「俳句革命の美名は何処迄も捨て難いであらうが俳句破壊の結果は最も其怖るところである。」（ホ誌大正二年六月）

虚子は「大正四年四月に『進むべき俳句への道』をホ誌に発表する。

「諸君の進み来つた道は諸君の進むべき道である。人々の進んで来た道が自分と違つているからと云つて直ちに其道が誤つているとは言えないのである。」

「ホトトギス」に雑詠の選をするのは虚子趣味を推し進めようとするのでは無い。「諸君をして諸君自身の道を開拓せしめようとするのである。」この言葉は新傾向俳句で惑つていた各地の俳人からの支持を得ることになる。

「子規居士時代の俳句並びに俳句に対する居士の主張と、今日の我等の俳句並びに俳句に対する主張とのうえで著しく相違しているのは主観的なことである。居士は小主観を喜んだ月並み句に対する反動として客観趣味を鼓吹したのであった。」と虚子は述べる。

「進むべき俳句への道」で虚子は渡邊水巴、村上鬼城、長谷川零余子、前田普羅、原石鼎、増永祖春、長谷川かな女など俳壇のリーダーとなる三十二人の雑詠を二十四回にわたつて評している。また虚子は帝大俳句会の富安風生、山口誓子、水原秋桜子、高野素十、山口青邨らを指導した。

虚子は昭和四年に「花鳥詠詠」を発表している。

「俳句は季題が生命である。すくなくとも生命の半ばは季題である。されば俳句は花鳥（季題）詠詠の文学であるのである。文芸は人の心を詠うもの（詩は志なりといふ言葉があるやうに）である以上、何も季題に束縛される必要は

ないではないか、といふ議論は、詩論としては正しい。が、俳句論としては成り立たない。季題といふものを除いては俳句はあり得ない。それは俳句ではなく唯の詩となる。詩としては成り立つが俳句としては成り立たない。」

(玉藻 昭和二十七年十二月)  
虚子は花鳥は自然のすべてであり、その中に人間も含まれるとしている。

その虚子に対し、水原秋桜子は違和感を持つようになる。虚子は客観写生を強調し、主観的であることを述べたが、それは明治時代に子規と約束をした明治の新俳句の隆盛を維持するための、初心の大衆を導く常識的、啓蒙的なものであった。

それが句の調べの上に主観をのせて行こうとする秋桜子には、物足りなく思われたのである。

秋桜子は「自然の真と文芸上の真」を発表する。

「文芸上の真とは鉾に過ぎない自然の真が、芸術家の頭の溶鉾炉の中で溶解され、しかるのち鍛錬され、加工されて、出来上がったものを指すのである。」

(馬酔木 昭和六年十月)

秋桜子が虚子に抵抗しホトトギスを離脱したことは、俳句界にとっては刺激的なことであった。秋桜子の流れはのちの新興俳句運動へとつながって行くのである。

新興俳句の左翼的、自由主義的傾向は当局によって弾圧され、別に中村草田男、石田波郷らの人間探求派と言われる動きが出てくる。

子規の三大俳論である「獺祭書屋俳話」「俳諧大要」そして「俳人蕪村」は近代俳句の後続の人々の俳句に大きい影響を与えている。

#### 〈参考文献〉

俳諧叢書俳論作法集

博文館

俳句講座第五卷俳論俳文

明治書院

近代俳論史

松井利彦 桜楓社 ほか

(平成二五年一〇月例会講演 常任理事)

# 子規五友の一人 森知之の生涯

佐伯 健

はじめに

森知之は松南と号し、松山中学時代には子規、三並良、竹村鍛、太田正躬と共に同親吟社をつくり五友と称した。軍人の道を歩み大佐で退役した後、請われて道後湯之町町長をつとめるが、その生涯については未詳の事が多い。

この度、伊豫史談会資料「道後文化資料」全十四卷（註一）を調査し、その第十卷人物編に「森知之自叙伝」（註二）を、第七卷文学編五に「森松南詩稿」（註三）を発見した。「自叙伝」には生誕から陸軍退役に到る詳細が、「詩稿」には晩年漢詩八十八首が記されていた。先行研究としては「子規会誌」二十八号に、足立修平「森松南と霽月」がある。未解明の事象も残されているが、子規全集や先行研究の論考に、自叙伝・詩稿の新資料を加えて、全生涯を時系列で且つ多面的に追うことで、森知之の思想信条、その人間像を明らかにしたいと考えた。

幼年期から東京遊学まで

一、出生 慶応二年（一八六六）九月一日

自叙伝「森知之は幼名を貢と称し、松南を号す。慶応二年丙寅九月一日伊予松山末広町に生る。父は松山藩士族産科医森知敏医號昇益と称し、天保五年生まれにて同国永田村医師夏井家の二男として生まれ出て、森家の養嗣子となれり。母は森家の長女にて仲と称せり。慶応三年丁卯八月六日母仲病死したるを以て、生後十一月の貢はお梅と称する乳母に依りて成長せり（中略）兄弟は男二女二の四人にて長女の次は長男知一にて元治元年甲子生まれ幼名益三と称す。次は知之次は異母妹なり」

●「松山藩役録」松山武鑑嘉永五年 森周哲 御番医師格 七人扶持

●明治十四年一筆限帳 末広町十七番地 森知敏

●「松前町史」明治の初期、夏井玄崑永田で医師を開業、その子夏井正胤は、明治三十四年七月、永田村で開業—森周哲が森家初代、永田村夏井家が父知敏の生家である。

## 二、明教館幼年部入学 明治四年（一八七二）

自叙伝「元結を以て頭髮を一括し小倉袴をはき脇差し一本をさし本夾とて板二枚の間に書籍を挟み真田紐を以て締め之を肩に掛けたり。脇差し彫刻附朱塗にて外見誠に立派な者なりしも刀身無きものにて当時之を「キコザイ」と云へり。之は子供の危険を豫防する為なり（中略）扱當時は一六とて一と六の日は休日、其他の日は学校に行く。四日学校に行き一日休暇なり。毎日払曉前に家を出で、途中三々五々友人を誘ひ出して学校に同行するを例とす。学校の課目は、論語、孟子、大学、中庸の素説と習字にて、五六人乃至七八人の先生の方に行きて教を受け、終れば一人宛て家に帰る」

明教館は明治三年の藩政改革により庶民にも開放され、大原観山、浦屋雲林、近藤元脩が去つてゐる。森知之は明教館養成舎に通つた最後の世代になり、明治五年の学制發布前の貴重な記録と言える。

明治四年、森知之は親戚安長家の養子となるが、名義のみで日常は実家に起居し、学校も森姓で通した。安長姓を名乗るのは明治十六年の上京後である。安長家は市坪村の名家であり、石手川の安長堤や安長渡にその名を残し、市坪素鷲神社や放免日招神社の玉垣には、一族の刻印がある。

## 三、智環学校入学 明治五年（一八七二）

自叙伝「明治五年七才の時学制改革となり智環小学校に入學せり。初めは此小学校も法龍寺の本堂を充用し、後榎町の新築に移れり。智環学校時代の友人は、正岡常規、三並良などにて、受持の先生は青野清夫先生、課目は読書、習字、教科書は福澤先生著世界國盡なり（中略）其後正岡も三並も予も同時に智環学校より勝山学校に転校したり」

・「伊豫史談」八十七号 森知之「少年時代の正岡子規」

「或時子規を訪はんとし湊町の新町を東上し三並の家（生家歌原氏の家）に至りしに三並と正岡と其門前にて喧嘩しつゝあり、三並は正岡より年長にて、上より正岡の鬚を握り互いに組合たりしを中間に分け入りて和解したることあり」なお子規の断髪は明治八年のことであつた。また、明治十年の西南戦争にかかわり、自叙伝に「湊町本屋に掲げたる戦争の錦絵を見る事を唯一のたのしみとし、友人正岡常規の家に往復する毎に、長時間本屋の店前に停立し、「岩村高俊單騎博多に走る」などの絵は最も気に入りしものなりし」とある。文中の本屋は、子規や森知之が貸本を借りた、湊町三丁目の大和屋と思われる。

## 四、松山変則中学入学 明治一三年（一八八〇）

自叙伝「千舟町に河東静溪先生と云ふ昇（ママ）平校出の漢学先生あり。友人十餘人と共に夜間先生の居に就いて唐

宋八大家文の講義を聴くこととなり、時に大詩会を開くこともあり。當時此夜学に來会したる友人は次の八人を記憶せり。正岡常規、三並良、竹村鍛、太田正躬、柳原正之、西原義任、西原武雄、武市庫太

・「子規全集」第十卷「筆まか勢」「五友の離散」

「余は幼時郷里に在る頃 太田、竹村、三並、安長の四子と交最も多し 人も余も稱して五友となす 詩會 書畫會を共にし終には共に五友雜誌なる者を發兌するに至れり」

・「伊豫史談」八十七号 森知之「少年時代の正岡子規」

「子規は學問には随分勉強したる者也、然るに衛生と云ふことは毫も顧慮せず机に對して讀書或いは詩文を作る時夜は十二時でも二時でも三時でも興起れば一睡もせず勉強す故に朝十時頃訪問する時尚寢床に在ること縷々なり、又運動と云ふことは絶対無し」

・和田茂樹編著「子規と周辺の人々」

「静溪塾に学ぶ五友に西原、柳原、梅木など数人が加わり、漢籍勉強のほかに詩も作り始め、同親吟会をつくり、各家持ち回りとした。最初の五人を五友と稱し、明治十四年には、「五友雜誌」「莫逆詩文」等回覽雜誌をつくり、同人評のあと、静溪・浦屋雲林先生の批評を受けた。此の相互評價は、サークル活動というべきで、子規終生の文学活動となった。」

(一) 漢詩

「子規全集」第九卷初期文集には、森知之の漢詩四十首余りがあり、多くは南溪の号を用いている。松南の号は天岸静里によるもので、明治十六年以後に用いられる。

・「子規全集」第九卷頁六五四「月夜遊梅邑」南溪 明治十四年三月

庚辰三月既望。會數輩友人訪余茅蘆。時月色皎然空無一朶之雲。煌々爛々遊情頻起。一友歛然起立而曰。今宵月色最善。天假人以行樂。願到梅村花下欲富錦囊。余等奮然議決矣。乃飄々乎出柴門。走數十丁漸到花村。々々左右山狹隘一彈丸地無不處梅花陽々春月添而花盆雅矣於爰出所携酒肴。飛羽觴以醉月。恰彷彿李園慢遊之時唯梅与李異耳江水洋洋連遙天銀光照流玉鱗流頭上之玉骨欺雪脚下之清泉如藍余時求筆賦詩曰。

「庚辰三月既望。會せる數輩友人、余の茅蘆を訪ふ。時に月色皎然空に一朶之雲無し。煌々爛々として遊情頻りに起こ

る。一友歛然起立して曰く、今宵月色最も善し。天假に人をして行樂を以てせんと。願はくは梅村の花下に到りて錦囊を富まさんと欲す。余等奮然として議決す。乃ち飄々乎として柴門を出づ。走ること數十丁、漸く花村に到る。村の左は江、右は山狹隘にして一彈丸地、梅花陽々たる処ならざる無し、春月添ひて花盆雅なり、爰（ここに）出所して酒肴を携さふ。羽觴を飛ばし以つて月に酔ふ。恰も李園慢遊之時を彷彿とす。唯梅与李を異にするのみ。江水洋洋

として遙かに天に連なり、銀光流れを照らし玉鱗流る。頭上之玉骨雪かと欺き、脚下之清泉、藍の如し。余時に筆を求め詩を賦して曰く」

多年貯得臥雲心 一夕風吹到水滄

紅白梅花烟霧裡 江頭閑生月前吟

「多年貯えたり臥雲の心 一夕風吹き水滄に到る

紅白の梅花、烟霧の裡 江頭閑かに月前の吟を生ず」

則又廻杯数次。江頭微風起花片飄々。円月登半天。水色愈

白。此時夜正三更不得止拂席席。

・「子規全集第九卷」諸先生刪正詩稿「雪」聯句

夜色沈々詩思清知之

臥聞撩乱打欄鳴 窓明便訝月華上常規

地白不看梅影生 靜積山川絶無響知之

輕推松竹又爲声 閑人早起何知冷常規

江北江南曳履行知之

（除前聯外猶覺生穉大不似両賢同心協力之作哩）

「夜色沈々として詩思清く（知之） 臥して聞く 撩乱欄を

打ちて鳴る 窓は明るく便ち訝しむ月華の上（常規） 地白

く梅影の生ずるを看す 靜かに山川に積り絶えて響き無し

（知之） 軽く推す松竹又声と爲るを 閑人早く起き何ぞ冷

たきを知るべし（常規） 江北江南、履を曳きて行く（知

之）」（前聯外を除き猶ほ穉大を生ずるも両賢似ざるを覺

ゆ、同心協力の作哩）

## (二) 画

松南は幼年期より絵を得意として、しばしば友人の風繪を描いた。中学時代には坊主町に住む森家遠縁の画家、石津雪竹に就いて四君子、山水などを習う。「子規全集中に「題森松南画山水」などの詩あるは此時代の画なり。一時は繪を専門にして世に立たんとし父に話したりしに、懇々其不心得を論され中止したり」と自叙伝にあるように、並々ならぬ熱心さであった。三並良は「子規全集」別卷三「子規の少年時代」に「我々はその外に、書畫会を組織し、詩會同様にやつて居た。（中略）子規は最も熱心であり、達者でもあつた」と記しているが、その子規も松南の画には一目を置いていた。「子規全集」第九卷には、「題安長松南画山水」「題松南墨菊」など、題画吟十五首がある。和田茂樹先生は「絵が巧みで、少年子規の絵心を誘い出した。子規が晩年病床にあつて、「菓物帖」などすばらしい画才を發揮した最初の因は、この森にあるといえよう」（註）と、松南の影響力を指摘している。

（註）昭和四十五年「朝日新聞」「子規への手紙」十二「森松南」

## (三) 仙人思想の流行

・「子規全集」第十卷「筆まか勢」第一篇「仙人的思想」

「ある時安長松南わが家に來り畫などかきし折柄、後來学校を卒へなば共に閑居せんとの計畫をなし、余は其デザインをなし松南に畫かしめしが、其畫今はなかるべし。其趣向

は正面の山間より瀧落ち、其水は淵をなし潭をなして流る  
其岸にある岩石の間に一軒の水亭を立て 其中に存て詩  
を賦し水を聴きゐるものは即ち我なりし也」

子規の仲間達は仙境に憧れ、明治十四年には子規が、翌  
年には松南が岩屋寺に旅をする。

#### (四) 擊劍

自叙伝「直眞影流の擊劍指南番たりし田辺和尚は榎町に道  
場を作り青年を集めて劍道を教授したり。友人にて田辺門  
下に在り上達したる者は清水政則、松本正潔の二人を記憶  
す。」

榎町の空地に竹矢来を組み、道場としていた。三並良は  
「子規の少年時代」に次のように記している。「士族の子弟  
として擊劍は稽古したいと思つた。家にはまだ一切の道具  
があつた。我々五人の連中は何時の間にか、多くは家の中  
庭へ放課後集つて打ち合ひ出した。子規も無論熱心によ  
る方だつた。彼は決して女のやうな男ではなかつた」

(五) 子規との別離 明治十六年(一八八三) 六月十日

・「子規全集」第九卷「東海紀行」

「同日午後親族ト離宴ヲ開ク 太田森二氏余ガ家ヲ訪フ共  
与二道後二遊フ 盖シ数年間復タ浴スル能ハザルナリ(二  
字抹消)ヲ以テ今夜別ヲ惜マント欲スルナリ」

翌十日、太田正躬と共に三津浜まで子規を送っている。

#### 五、東京遊学

自叙伝「吾等中学校に在りし同級生は卒業せずして上京し  
たる者多し正岡常規も亦然り。予は明治十六年十八才の時  
中学を卒業し其年の暮に父の許可を得て東京に遊学せり  
(中略)父は祖先傳來の医業を継続せしめんとし医学修行を  
条件として上京許可せられたり」父知敏は医業継承を知之  
に託した。

上京直後の十一月八日、子規と共に加藤拓川の渡仏準備  
を手伝っている。

(一) 日本橋区浜町久松藩邸(自叙伝より)

#### ○書生小屋

「上京の後は一時日本橋区浜町の久松藩邸の書生小屋に寄  
寓したりしも父との約束もあり当時東京に於ける内科医と  
して有名な櫻村先生(註)の塾に入り、第一に解剖学の  
書を読みたりしが、医学は自分の天性に合せざるものと決  
心したり」

(註) 櫻村清徳 東京医学校教授、山龍堂病院長、明治天  
皇侍医。娘の櫻村ヒサは明治三十年八月、加藤拓川に嫁す。

#### ○天岸静里寓居

「明治十七年十九才の時天岸静里先生旧藩主久松伯爵の侍  
医として上京、浜町の藩邸に寄寓せらるや先生に請うて門  
下生同様として同一長屋に寄寓するの許可を得たり。当時  
予は既に陸軍士官学校入校の希望を有せるを以て、一日志

を陳て先生の同意を得、又先生の尽力に依りて父の許可を得たり」

父知敏は大学正科入学を強く望んでいたが、知之は学費途絶を心配して、士官学校受験を決意する。

「毎日早朝弁当を携て日本橋区浜町の藩邸を出で四谷見附富士見町の温知塾に通学し、帰路は九段坂上の憲兵屯所に於て撃剣を学び薄暮の頃、浜町の藩邸に帰還するを例とせり（中略）藩邸内の先生の寓居は四五室にて、先生は座敷に、予は三畳間位の室に机を置いて勉強せり。別に六畳位の茶の間あり。炊事掃除に任ずる老婆ありて、常に此茶の間に起臥したり」

(一) 子規との交友

共に内藤鳴雪を訪ね詩作をし、亀戸天神に観梅をする。

「子規全集」第九卷「郷黨人物月旦評論」「安長知之君」に、

「正直淡泊比スル所ナシ 詩オアリ少シク傲剛ノ意アリ

進ンテ止ムナクンハ天下ニ為スヘシ」とあるのは子規の評と思われる。明治十七年子規は松南に次の詩を贈っている。

・「子規全集」第九卷頁五五〇「贈安長松南」

与君共是海南客 同為遊子來東國 在郷是朋在旅朋

与君始終相共遊 松城清風看明月 墨水烟火放孤舟

十年交際豈徒爾 又非管鮑雷陳比（後略）

「君と共に是れ海南の客 同じく遊子となりて東国に来る

郷に在りて是れ朋、旅に在りても朋 君と始終相共に遊

ぶ 松城の清風、明月を見る 墨水の烟火、孤舟を放つ  
十年の交際、豈に徒爾ならんや 又管鮑雷陳の比に非ず」



子規と松南、明治十七年  
東京神田で撮影。

新潮日本文学アルバム  
「正岡子規」より

(二) 陸軍士官学校受験 明治十八年（一八八五）四月

自叙伝「明治十八年二十才の四月に陸軍士官学校の入学試験を受けた。試験後五月頃東京より神奈川迄汽車、夫より東海道を名古屋迄徒歩旅行、名古屋より神戸迄汽車、夫れより汽船にて三津浜に上陸（中略）此間京都同志社に遊学中の武市庫太東正義君などに再会したり」

この夏、松山に帰省した子規は松南、竹村鍛と共に永田村に武市庫太を訪ねている。

壮年期（軍人時代より道後湯之町町長へ）

一、陸軍士官学校入学 明治十八年九月一日

自叙伝「予の士官学校に入校するや先生に來倫国の短刀を賜ふ。今尚家宝として秘蔵す（中略）入校後は日曜祭日の外出日には必ず先生を訪問したり十月頃ならん先生病に依り、松山に帰還せられ十二月廿四日を以て歿せらる享年

五十七。嗚呼先生の殊遇の恩に酬ゆる事能はず」

## 二、松山連隊に着任 明治二十一年七月

自叙伝「明治二十一年七月廿八日、廿三才を以て陸軍士官学校を卒業任歩兵少尉補歩兵第二十二連隊附、郷里松山連隊に帰還する事となれり（中略）父は親戚故旧と共に三津海岸の窪田（久保田）汽船問屋に酒肴を準備し、吾等三人を迎へらる。此の日の喜びは永久に忘るる事能はず。父も亦同一の喜びなりし事と信ぜり」

同期の歩兵少尉大冨和與次、岩本宗太郎と共に着任する。

## (一) 父森知敏逝去 明治二十二年十二月二十九日

自叙伝「河東静溪先生の撰に係る墓標にも、森亨昇益之墓とある如く、父は医號昇益を以て有名なりし。身長五尺七八寸、偉大なる体格にて天性酒を好み、酔へば則ち談論風発（中略）天岸先生の談に依れば、維新前江戸に於いて暗殺流行の一夜、昇益外出夜おそく藩邸に帰らず。大に心配して所々搜索せしに、何時の間にか自分の部屋に帰り、酒樽を枕にして高鼾で熟睡して居たりと」

壇寺である中の川長圓寺が手狭の為、末広町法龍寺にて葬儀を行い、西山宝塔寺に埋葬する。享年五十六才。

森知之は私生活を一切記さず、家族の詳細は不明であるが、長男知席については官報に「大正二年十二月任騎兵少尉」とある。明治二十四年庚寅の生まれとすると、森知之

は明治二十二、三年頃に、松山で家庭を持つたと思われる。

## (二) 子規との交友記録

子規は明治二十二年「筆まか勢」「交際」に五友を「好友 太田躬氏、益友 三並良氏、敬友 竹村鍛氏、舊友 安長知氏」と記し、「五友の離散」にはその消息を詳しく記述している。

「然るに明治十五年の夏三並氏京に赴く 是れ五友分離の始め也 翌十六年の夏余も東京に行き 太田 安長二子亦尋で来る 一年を隔てて竹村氏亦京に來り 五友終に復東京に會せりと雖も 實際五人が一處に打ち寄りしことは一度もなし（中略）明治二十一年の夏には太田氏大坂に行き 安長氏郷に歸る 五友復三處に分住す（中略）冬亦帰郷せしに太田氏も亦郷に在り 膝を交へて談論するを得たり 安長子とも一二度逢ひしかども 未だ三人共に袂を連ねるの期を得ず 然れども今日に在ては未だ離散といふを得ず 今二三年を過ぎなば其離合如何ぞや 今日に於て夢想し能はざる所ならん」

## (三) 安長より森への復姓

明治二十七年二月十三日の「海南新聞」に、安長知之、森姓復姓の広告を載せる。上京時より十年余りの安長姓であった。

三、日清戦争 明治二十七年（一八九四）

明治二十六年一月陸軍大学校に入校、翌年七月動員下令により大学校は解散、松山二十二連隊に帰隊する。八月仁川に上陸し各地を転戦、明治二十八年五月二十五日高浜に帰還、補充大隊副官となる。八月二十五日、子規が大原恒徳宅に帰着し、二十七日には愚陀仏庵に移る。この時期の自叙伝に子規の記述は無く、子規にも再会の記録は無い。二人はお互いの消息を知らなかったと思われる。



明治三十年陸軍大学  
校卒業時（推定）

新潮日本文学アルバム  
「正岡子規」より

○森家六代の戸主  
明治三十六年兄森知一が歿し、森知之が森家第六代の戸主となる。

四、主な軍歴

和暦	年齢	履歴
明治二二年	二三	官報七月三十一日 任歩兵少尉補第 二十二連隊小隊長
明治二六年	二八	陸軍大学校入校
明治二七年	二九	日清戦争従軍
明治三〇年	三二	陸軍大学卒業、官報十二月二十六日 補歩兵第二十二連隊中隊長
明治三六年	三八	補歩兵第四十四連隊大隊長、翌二月 病気の為道後温泉転地療養、四月補 補充大隊長
明治三八年	四〇	五月遼東半島兵站副官、八月第十三 師団参謀
明治四二年	四四	官報九月二十一日 任歩兵大佐補歩 兵第二十九連隊連隊長
大正元年	四七	九月補臨時朝鮮派遣第一連隊連隊長
大正二年	四八	官報八月二十三日 予備役編入

## 五、道後湯之町町長

森知之は大正二年八月二十二日、臨時朝鮮派遣歩兵第一連隊連隊長を最後に退役、大正五年請われて道後湯之町町長となり、二期を務めて大正十一年退任する。明治二十二年伊佐庭如矢が初代町長に選ばれた後、泉丈三郎、篠原那貫、橘欽也、中川鼎貫が歴任し、森知之は六代目であった。町長在任中に、次の書籍を発行している。

- ・大正七年五月発行 「道後温泉誌」
- ・大正八年四月発行 「いよのゆ」高濱虚子著
- ・大正八年四月再版 「道後温泉入浴案内」

## 晩年期

### 一、悠々自適の引退生活

町長退任後は石手義安寺下に居を構える。石手川の堤に四季を写生し、畑に野菜を作り、詩を詠み書に親しみ、温泉に朝湯を楽しむ、自適の生活を送る。

- ・大正十二年海南新聞社「愛媛県人物名鑑」第一

「大正五年道後町長に挙げられ、十一年満期、辞任したるが、人となり活潑快活、すこぶる交際巧みにして長幼共に之を外さず、特に書畫に堪能にして其の畫筆は優に一家を成し、且つ俳趣味をも帯びた面白い人である。」

- ・西田正義・澤本勝共著「道後平野の文化」昭和二年

「前々町長の森知之は陸軍大佐で今では義安寺の東の田圃の中にペンキで悪戯したような變な住宅を建て繪筆を握つて「マチス」がどうの「セザンヌ」がどうのと荐りに熱中してゐる。何日か遭つた時「愛媛憲政史」を買ふてくれと云ふたら繪の本なら何でも買ふが政治の本は眞平だと手を振つて断つたことがある。」

「道後文化資料」第七卷松南詩稿には、大正九年から昭和十年にかけての晩年漢詩、八十八首が記されている。

- ・松南詩稿 「村居雜詠」大正十一年

法宇陵頭碧水涯 新居工就避紛譁

南庭梅樹西庭杉 赤瓦摩天是我家

「法宇陵頭碧水の涯 新居工就き紛譁を避く 南庭の梅樹、西庭の杉 赤瓦天を摩す是我が家」

- ・松南詩稿 「描自画像三百回賦一詩」昭和六年

三百餘回描自像 苦心慘慘未迎春

可憐日々盡全力 猶写形骸不写神

「三百餘回自像を描く 苦心慘慘未だ春を迎へず 憐れむべし日々全力を盡すに 猶ほ形骸を写すのみにして神を写さざるを」

- ・松南詩稿 「海軍大将齋藤実拜内閣総理大臣之大命」昭和七年

明詔果降社稷臣 国民歎喜頌声頻

豺狼絶跡狐狸走 始見神州万象春

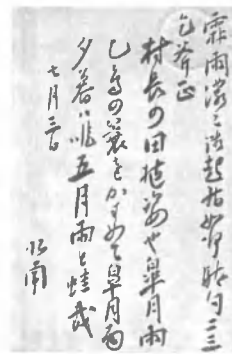
「明詔果して社稷の臣に降る 国民歎喜し頌声頻りなり」

豺狼跡を絶ち狐狸走る 始めて神州万象の春を見る」

## 二、村上霽月との交友

共通の趣味を持ち思想信条も近かった二人は、町長時代より最晩年に至る迄親交を結ぶ。大正九年より昭和十八年にかけての霽月宛書簡、百数十通が現存している。

・大正十一年七月三日 霽月宛葉書



中野匡子氏提供

「霖雨濛々御起居如何 駄句二三乞斧正

村長の田植姿や皐月雨

乙鳥の蓑をかすめて皐月雨

夕暮は唯五月雨と蛙哉

七月三日 松南」

足立修平「森松南と霽月」には、松南の俳句との係わりが、次のように纏められている。「子規五友の一人であり、俳人霽月・黙禪を親友として持つ松南は、不知不識の間にその影響を受けて俳句を作るようになったとしても不思議ではない。自分は俳句の門外漢だからと言って俳句の批評さえも遠慮勝ちにしているが、霽月への端書にはしばしば

俳句が書き添えられている。霽月はこれを評して、「不得要領」と言って返して来るが、それにもくさらず、次々と作句してこれを示し、又蕪村の句集も読了するほどの熱心さである。」

・大正十三年「はざくら」新年号表紙



松南画、題字は霽月

愛媛県立図書館蔵

大正十二年に玉木北浪が俳誌「はざくら」を創刊した。選者は村上霽月、後に酒井黙禪が継ぐ。大正十二年から十三年にかけて、松南がその表紙絵を描いた。

松南の霽月宛書簡には、松南詩稿に収められた漢詩多数が記されている他、絵に関する記述も数多く見られる。

・昭和二年十一月霽月宛書簡

「野菜はよく出来たが絵は毎年不如意、殊に蔭の色に苦しむことと相成候。描法も従来の方法にては駄目に候。我々の相試み候ひしも未だ一点の光明をも発見し得ざる有様、五里霧中に彷徨致居候」

また昭和二年三月十七日霽月宛書簡には「子規の言に、新井戸を掘るときは汲んでも汲んでも泥水が出る。幾回と

なく汲み上げておると遂には清水が出て来る。俳句も同様である。最初は多作すること必要なり」と。絵も亦同様、蕪村の如きも四十、五十は随分拙劣なりしも六十以後に於いて汲上げたこと。松南も今は濁水の汲上最中に候、七十にもなれば多少の清流を汲み得ることと存候」と注目すべき挿話を残している。

・霽月折込書画帖 松南漢詩 昭和七年

明治 昇降大

節人 國民鏡

嘉頌 豺狼絶跡

跡 狐狸通始見

神物 萬象春

中野匡子氏提供

松南

明詔果降大節人

國民歎嘉頌聲頻

豺狼絶跡狐狸通

始見神州萬象春

無題 壬申初夏

松南

中野匡子氏提供

昭和六年の霽月句集刊行を祝い揮毫。前出の松南詩稿と比べると、推敲を重ねている様子が窺える。

三、「松南詩稿」に見る交友関係

○大内通(国手) 加藤拓川の遠縁で晩年の侍医。大内国手に寄せた詩は「松南詩稿」に八首あり。昭和八年六月、愛

蔵の下村為山作「老杉墨画」を、松南に形見として贈る。

予亦七絶一首謝其好意 二年後昭和十年六月五日君長逝矣

生前遺物老杉画 一瞬驚奇復感誠

濃淡淋漓雄健筆 長思割愛贈吾情

「生前の遺物、老杉画 一瞬にして驚奇し復た誠に感ず 濃

淡淋漓として雄健の筆 長く割愛を思ひ吾情を贈る」

○太田正躬 子規五友の一人

・松南詩稿 「寄太田黙庵」 昭和元年頃

十五共君学 六十與君逢 君髮何其白 我頭何其鬆

鬆頭白髮非所恨 唯願心身共強健 壯須發奮成功名

志應養性遜煩悶 五友僅存子與吾 詩酒樂天如餐飯

石鉄之山拓川流 自古海南山水幽 大都元來非壽地

歸來何不學留候

「十五にして君と共に学ぶ 六十にして君と逢ふ 君の髪

何ぞ其の白きこと 我が頭何ぞ其の鬆たる 鬆頭白髮恨む

ところにあらず 唯だ心身共に強健たるを願ふ 壯にして

須らく發奮して功名を成さんと 志まさに養性して煩悶を

遜す 五友僅かに子と吾と存するのみ 詩酒樂天、餐飯の

如し 石鉄之山、拓川の流 古へより海南の山水幽たり

大都元來壽地にあらず 歸り来りて何ぞ留候を学ばざらん

や」

太田正躬晩年の号黙庵が、初めて明確になった。

・昭和十一年三月十四日霽月宛書簡

「高濱虚子君の洋行壮なりといふべし。大阪の太田正躬君二月廿四日遂に逝去、小生とは少年以来の友人、交遊六十年に近し、哀悼寂寥の感に堪へず候」

○乃万文太郎（黄鶴仙）黄鶴仙に寄せた詩は十首と詩稿中最も多い。乃万文太郎は久米村大庄屋乃万安決の孫で、陸軍士官学校では森知之の二期後輩になる。日清戦争では平壤近郊船橋里の戦闘に於いて負傷、退役となる。文太郎は明治三十五年頃、昵懇の三輪田米山を訪ね、祖父安決墓碑の撰文と書を依頼する。久米駅西南の長善寺にある乃万安決墓は、現在松山市史跡に指定されている。

・松南詩稿「中秋観月次黄鶴仙之韻」昭和二年頃

獨倚欄干對月輪 追懷往事万感新

船橋里畔舊時月 應昭將軍山上人

「獨り欄干に倚り月輪に對す 往事を追懷し万感新たなり

船橋里畔舊時の月 應に將軍山上の人を照らすべし」

・松南詩稿「壬申四月二十一日到久米村長善寺列黄鶴仙乃万詞兄先

妣之葬」昭和七年

日暖風微春色清 豊碑工就列先塋

貞魂應喜郷山水 八十五年故舊情

「日暖かに風微かに春色清らかなり 豊碑の工就き先塋に

列す 貞魂應に郷の山水を喜ぶべし 八十五年、舊情故の

ままなり」

その他には、山本梅涯に三首、玉木北浪・佐藤黙堂・北

山啓助・東正堂・永井（政忠カ）に各一首を寄せている。

#### 四、最晩年の記録

・昭和十七年六月六日、最後の霽月宛書簡

「御健勝奉賀候 老生幸二無事乞放念 竹友君二日本画ノ  
教示ヲ受ケ目下甲冑画考案中ニ候 幸ニ健康後圃ニ蔬菜モ  
成長 人生ノ幸福ハ此裡ニ在リト樂居候」

・「伊豫史談」第一二三号 玉井祐成「正岡子規の漢詩と其の學友」  
昭和十八年三月五日発行

「自分は昨秋子規筆の「五友詩文」といふ半紙七枚綴の冊  
子を手に入れた（中略）森知之翁も六十年昔に作った五人  
の詞を読み、且つ子規の筆跡を見て感慨無量のやうであつ  
た」

・「陸軍士官学校名簿」

昭和十八年一月四日 森知庸中佐戦死（森知之長男）

・「子規遺芳」頁七

昭和十八年一月十九日、末広町正宗寺にて子規会発会する。  
これに先立ち、森知之に案内状を發送するも返信なし。

・「朝日新聞」和田茂樹「子規への手紙」十二森松南 昭和四十五年

昭和二十一年一月逝去 享年八十二歳

## まとめ

子規と森知之には趣向の類似性があり、共に漢詩や書画に傾倒し、互いに敬意を持って交友を深めた。長じて子規は文学に知之は軍人に道を定め、志に従って共に刻苦勉勵する。知之は陸軍大佐で退役した後、請われて道後湯の町町長となるが、温厚でまことに親切な紳士として記録されている。出処進退に潔いと言える。晩年は田畑に汗を流す一方、写生に励み詩を詠み悠々自適の生活を送る。少年期の子規と松南が憧れた仙境を彷彿させる、陶淵明のごとき田園生活を、正に実現させたと言える。打ち込んでいた絵画は趣味の域を超え、最晩年に到るまで研鑽を積む。蕪村に傾倒し、晩年においてもなお成長できるとの、強い信念に基づくものである。村上霽月の影響を受け句作にも励むが、あくまで俳句は門外漢として、謙虚な姿勢をくずさなかつた。晩年の漢詩には人への深い慈しみを感じる。

森知之の生涯は、豊かな感性を磨いた少年期、志を立て刻苦勉勵した青年期・軍人期、世相から身を引きながら、自己実現の為に研鑽を続けた晩年期と、まことに見事な一生であったと言える。子規は多くの優れた友人に恵まれたが、森知之も亦、その一人であった。子規五友の歴史は、森知之と子規の交友から始まり、森知之の死によってその幕を閉じたと言えよう。

本稿発表に当たっては、古茂田進雄氏に「道後文化資料」を紹介して頂いた。また和田克司先生には多くのご教示を頂いた。探索に当たっては渡部平人氏、乃万美奈子氏、鳥谷照雄氏、土居俊夫氏、宇和宣氏、夏井紀明氏の各氏にご協力を頂き、中野匡子氏には「霽月宛て松南書簡」のご提供を頂いた。この紙面をお借りして、皆様に深く感謝を申し上げます。

### (補註)

「森家系図」 初代森周哲 ○ — ○ — 四代知敏

—— 一知 —— 知之 —— 知庸 —— 周

森知之長男知庸の夫人包子は、三津大原家大原右一郎の長女。子規と同じ大原一族である。

(註二) 道後資料調査会が作成、調査時期は昭和十五年前後と推定される。資料は道後温泉事務所、篠崎権衛、景浦直孝の三か所に保管された。昭和五十年に十四巻に製本の上、景浦勉氏より史談会に寄贈される。

(註二) 写本、B5版七十二頁。昭和十一年の執筆と推定。

(註三) 写本、B5版二十八頁。大正九年から昭和十年にかけての松南漢詩八十八首を収録。

(平成二五年一二月例会講演 会員)

# 子規の用いた松山言葉

忽那 哲

子規さんの文学者としての活動ジャンルは、俳句をはじめ、短歌、小説、随想、漢詩、新体詩と極めて広い。そういう意味では史上希なる人物と言つてよい。しかもそれらの作品は皆、読めば読むほど味わい深く、われわれの心を捉えてやまないものである。なおかつこれが、三十五年の短い生涯の中でなされた仕事であることを思えば、まさに驚嘆に価する。

私どもは今、子規さん自身の用いた「松山言葉」について詮索調査しているところだが、この独特の優しさを秘めているかにも見える言葉が日常会話にはじまり、作品ジャンルのほとんどの中に入り込んでゐるのにはまた驚かされる。今回ここに記すのは、ほんの一部分であるが、子規の用いた「松山言葉」とその効用について述べてみることにする。例文中傍線の部分は子規の言であり、一語句の傍線部分は松山言葉である。なお、説明を付した箇所には傍線に記号を付した。

## 一 周囲の人が聞いた子規の松山言葉

1 子規居士追懐談 一 高浜虚子（子規全集・講談社）

『三津の生簀で居士と碧梧桐君と二人で飯を食つた。（中略）もう其頃汽車はあつたが三人は態と一里半の夜道を歩いて松山に帰つた。其は、

「歩いて帰らうや。」といふ居士の動議によるものであつた。——虚子と碧梧桐に

「帰らうや。」は典型的な松山言葉と言え、『伊予松山方言集』（東京帝国大学教授 橋本進吉序・岡野久胤著・図書刊行会）にも載つていて、「や」は願を表わす言葉とある。以下この書を参考書として見ていく。

## 2 同 追懐談 三

『居士の帰省中に、も一つ斯ういふ事があつたのを思ひ出した。（中略）居士が袴を穿いてゐるのは珍しいので「どうおしたのぞ。」と聞くと、

「喜安雄太郎はお前知つといでうが。あの男から講演を頼まれたので今其を遣つて来たところよ。」——虚子に

3 同 追懐談 七

「お前は人に相談といふ事をおしんからいかん。自分で思ひ立つと矢も楯もたまら無く遣つておしまひるものだから後でお困りるのよ。」

いかん については次のと一緒。

4 同 追懐談 十

「升さん、どうおした。」と聞いた。(中略) 子規に

「血を吐くから物を言つてはいかんのぢや。動いてもいかんのぢや。」(中略) 虚子に

居士は「お菓子をおくれ」と言つた。(中略) 虚子に

いかん は いけない (1)禁止、宜しくない。(2)悪い。

(3)困る。ぢや は だ である。(大阪語ではヤ)

お は敬意を表す接頭語。松山ではしばしば用いられる。親しみを込め、相手の気持ちをおもんばかりつつものを言う、やはり松山言葉独特の語と言へる。おくれは 下さい。

5 同 追懐談 十四

前後の文章を省略

「今誰が来ておみでるのぞい。」 妹 律に

ぞい は ぞ と同じく男性語。威嚇する言葉。注意する言葉。疑問。この場合は疑問。

6 『正岡子規』(抄) 高浜虚子 子規選集⑫(増進会出版社) 病床の子規居士

「何か食べるものはないのかなもし」と居士は突然声高に

叫ぶ。 母君 八重へ

「そうよ、あいにく何も無い」と母君が答えられる。」

なもし は(敬) 長上若しくは見知らぬ人に対し呼びかける最上敬語。発音は「なむし」に近い。子規は母君に対する言や母君の行動について言う場合には、たいてい敬語を用いている。

7 同 明治三十二、三年頃の根岸のある夜

「馬鹿を言え、そんなところまで拭かなくつてもその傍まで拭いとささえすればええじゃないか。お前は癩癩が強いから、そこを拭いて私がアイターと言わぬと気が済まぬのだから。アイターアイターアイター。それ、言う口の下から遣るじゃないか。アイターアイター、アアアア」と子規は大きな声を出して叫びながら涙をぼろぼろと零すのであります。

「もうこらえてくれ。アイターアイターアイター」

「そんなことをお言ではどうすることも出来んじやないかな。あたしどうしたらええのか判らん」

と妹さんもついに蒲団の上に顔を押し当てて泣き出すのでした。——子規の言(傍線) はいずれも 妹 律へ

ええは良い。宜しい。こらえる は『伊予松山方言集』に 我慢する。赦す。とある。

8 思い出の子規 天岸太郎 著(発行所 松山子規会)

印刷発売 青葉図書

『ある時、こんな会話を交わしたこともあった。』早く死に  
たくなつたかい。楽に死ぬる方法でな。』と子規はまじめな  
態度で言つたので鼠骨はわざと笑いながら「さう安くは問  
屋が卸さん、何が何んでもあしが（私が）殺さん、あしの  
目の黒い内は」と言つてのけると「ハ、ア問屋が卸さんか  
な、ハ、アたまらんハ、ア」と子規も笑つて其の後に訪  
れた人に「問屋が卸さんげな、鼠骨が殺さんと言ふかい、  
目の黒い内はなんていふのよ、助からんぢやないか」など  
ときげんよく談笑したこともあった。』

げな は『新明解国語辞典（三省堂）』（終助）（中部  
地方以西の方言）確かそのような事が有つたはずだな、と  
回想する意を表わす。とある。かい は松山言葉。ここは  
感歎的な表現として付されたもの。

9 子規を語る 河東碧梧桐 著（岩波文庫）

七 寄宿舎生活

『おふたりともおいでるだろうと思つていた』と、私達の  
部屋障子を明けたのは子規であつた。兄と私とは、ラン  
プを一つずつともして、夜の勉強をしていた。

『マアおはいり、何やらこの辺が綺麗におなりだな。』「そ  
よ、そう言われると何だか、ちようど二夕月目かやナ……  
あの床屋できよう始めて気づいたんだが、短尺をかけとる  
ナ。』

「ありやお前、ずつと前から……何やら深雪かなというの  
じやろうがナ。」

『そうかやナ。すると我輩もよつほど、うっかりひよんとし  
ているナ、近頃頭がわるいせいだろうか。ハハハハ。』（以  
下略）

おいでる は『伊予松山方言集』に 在宅 の意とある。  
アの 兄と私 の 兄は筆者（碧梧桐）の兄（竹村黄塔）。  
うっかりひよん は うっかり は ほんやり ひよん  
は ヒヨンナ で 変な の意。

10 子規を語る（9に同じ）

十四 三津のイケス

『子規、イケスも立派になつたな、フーン、昔は鯛だとかハ  
マチだとかカナガシラだとか、そんな魚を生かしている池  
があつて、ホンの飯位食う汚い家じゃつたがな、加藤の叔父  
に二、三度連れられて来たきりじゃけれ……これでは八百  
松そののけじゃな、尤もアシも東京の料理屋と言つたつて、  
八百松の外はどこもまだ知らんのよ、それもお前、ついこ  
ないだ誰かの御馳走で往つた最新知識でな……我々を何と  
思つたか、少々上等の座敷へ通し過ぎたようじゃな。』（以  
下略）

けれ は「カラ」から、故に。アシ は 僕（同輩又は後  
輩に対する自称）傍線部アの八百松は東京の料理屋。じゃ  
は、通し番号4に既出。

11 10の「十四三津のイケス」に続く、同文中の「競り吟」について述べている部分。競り吟とは運座（よい句を選びあう会）で句を出しあい詠みあうことを言う。

虚子「何か題を出してもらわんと……。」

碧梧「そうよな、のぼさん題を出しておくれや。」

非風「もう始めるのかな、野暮の床いそぎじゃな、まアゆつくり別嬪論でもやる位な余裕を持つとうじやないか、ハッハッ。」

子規「さア何でもそこらにあるものでよかるがな、何でもお出しや。」

非風「題を出すつて、いつもの競り吟じやろうな、それならアシが出す。田舎者の髪の匂い、どうぞな、いかなかな、女の素肌、こりやアチよつとよかるがな、いかな、そうかな、人三化七針金眼に団子鼻はどうぞなハッハッハッハッ。」

子規「エエ加減にしようや、へーさんお前何かお出しや。」

碧梧「出してもエエかな、じゃ蓮の花。」  
子規「蓮の花、そうそう来る道に咲いとつたな、アシら小さい時分、お嬢の蓮が一杯じゃつたがな、南堀端の何とか庄兵衛と言ったお爺さんが、蓮のさかり時分はポンポン花の咲く音がして、床の中でひとりでに目がぱちりと明き、ポンと来るとまた頭がさがり、またポンと来ると半身が起

きて、ひとりでに床の中から起きられる、とよいよいでた  
そうな。」（中略）

碧梧桐が次ぎに筆を執つた。

あまの子の女まじりに泳ぎかな

子規「おとなしく出ておいでるな。」

非風「オーイへーさん負けずにおやりよ、それ

酒樽を枕におよぐおやぢかな

酒樽かな、瓢箪をでもいいな、それ早くあとをおやり。」

子規「アハハハハまアアシにも書かせておくれ、大器晩成ともいかなかな。」

ともづなにあまの子ならば泳ぎ哉」

非風「こりやアのぼさんにも似合わん、あまの子の女交りの焼き直しじゃな。」

子規「イエ、少々弱つたのよ。」

碧梧「でも違つとるけれよかるがな、ナアきよさん。」

虚子「そうよなア、焼き直しとは言えまいな。」

子規「助け船助け船、余り責めつけられては気が気じゃな  
いけれな。」（以下略）

11の前半（中略）までの おくれや は「オクレンカ」  
下さいませんか。よかる は「イーデショ」宜しいで  
しょう。傍線部アの へーさん は碧梧桐さん。エエは  
良い、宜しい、好い。アシ は通し番号10に既出。言いよ  
いでたそうな は 言っておられたそうだ 松山言葉では

普通 だ は な と響きが柔らかくなる。

11の後半(中略)の後。出ておいでるな の おいでるは いらつしやる。アシ いかん じゃ よかろ は既出。けれ は「カラ」から 故に 10に既出。

## 二 「松山言葉」の効用について

松山言葉の効用について深めてゆくため、二つの参考文献を上げて説明を加えていくこととする。

その一 司馬遼太郎氏の小説『坂の上の雲』について  
方言には相手をおもんばかる優しさがある。特に松山言葉においては、既に述べたようにそれが著しい特徴となっている。例えば、司馬遼太郎著『坂の上の雲』に次のような記述がある。や、長文になるが、文春文庫 坂の上の雲 (一)より一箇所、(二)より二箇所記しておく。

### 1 文春文庫(一)11ページより(第一文)

松山藩がごまりぬいたのはそういう屈辱よりも、経済問題であった。賠償金十五万両というのは、この藩の財政からみればほとんど不可能な数字であった。

この支払いのために、藩財政は底をつき、藩士の生活は困窮をきわめた。

十石取りのお徒士の家である秋山家などはとりわけ悲惨であった。

すでに四人の子がある。この養育だけでも大変であるのに、この「土州進駐」の明治元年(慶應四年)三月にまた男児がうまれた。

「いっそ、おろしてしまおうか」

と、その懐妊中、当主の平五郎が妻お貞にいった。町家や百姓家では、間引という習慣がある。産婆にさえたのんでおけば、産湯をつかわせているときに溺死させてしまうのである。が、武士の家庭ではそういう習慣がなく、さすがに実行しかねた。結局はうまれたが、その始末として、

「いっそ寺へやってしまおう」

ということになった。

それを、十歳になる信さんがきいていて、「あんな、それから、いけんぞな」と、両親の前に行ってきた。由来、伊予ことばというのは日本でもっとも悠長な(なが)ことばであると言われてる。

「あんな、お父さん。赤ん坊をお寺へやってはいやぞな。おつつけウチが勉強してな、お豆腐ほどお金をこしらえてあげるぞな」

ウチというのは上方では女兒が自分を使うの(かみだ)だが、松山へいくと武家の子でもウチであるらしい。

(以下略)

傍線部ア「そういう屈辱」とは、松山藩の長州征伐の恨

みを晴らしてやると長州人が復讐心に燃えて三津浜に上陸、土佐の隊長小笠原唯八がそれをなだめて退去させたが、松山藩の汽船を奪われたりしたこと。

傍線部イ「信さん」は後の秋山好古大将。

傍線部ウこれは、この小説の作者司馬遼太郎氏の「松山言葉」に対する評であり、小説内の表記としては珍しく、注目すべきものであると思われる。

私がこの小説のこの部分を取り上げた理由もここにある。

司馬氏は「悠長なことば」と書いているが、その意味は「ただのんびり構えている」の意ではなく、既に折折に述べてきたように、相手の気持ちや態度しつつ、親しみや敬いの気持ちを込めて、優しい音韻をもって発する松山言葉の特徴を非常にうまく表現していただいていると私は考えている。

傍線部エ「お豆腐ほど」は、その厚さの大きいことを言うのである。

## 2 文春文庫(26ページより(第二文))

「淳さんや淳さんの兄さんは、いまごろ大いそがしでおいで

るじゃろ。それにひきかえてあしは庭の踏み石でもみじ打ちじゃ」

と、いった。子規の人の柄にはひがみというところがないからべつに自嘲でいっているわけではなく、ごくさりりといつているのだが、お律にはそうもうけとれないようにもおもえる。

ちようどそんなことがあつたあと、玄関のリンリンが鳴って、

「おたのみい」

という男の声がきこえた。

おたのみいなどと呼ばわってやってくるのは伊予の松山の男にきまつている。それも、城下の士族ことばであつた。

「あれは清さんではあるまいか」

子規は、縁側でお律にいった。陽がたつぷりあたっていて、お律のあごのうぶ毛が光っている。

お律が出てみると、やはり高浜清(虚子)と河東兼五郎(碧梧桐)のふたりだつた。

傍線部ア「淳さん」は好古の弟、後の日本海戦の演出者と称せられる秋山真之氏。

と称せられる秋山真之氏。

傍線部イでは松山藩の士族ことばの登場である。「ことば」の陰影を大切に司馬氏の姿勢がここに

も現われている。

3 文春文庫(二)129ページより(第三文)

かれら二人は、仙台の学校にとどまっていたのは二カ月にすぎない。

仙台でのさびしさと、いよいよこうじてきた文学熱が入りまじって二人とも憑かれたような勢いで退学届をかいた。

そのあとすぐ上京した。駅からまっすぐに根岸の子規宅にやってくる、先刻の

——おたのみイ。

になるのである。

子規は、かれらを自分の部屋に通した。ふたりは荷物を廊下に置いた。どちらも紺飛白のひとえを着ていたが着物もはかまも垢(か)じみていて、もしこれが女ならどうみても山だしの家出娘といったすがただった。

「人に相談ということをおしんからいけんのじゃ。これからどうおしる。なんでもかんでもこうと思えば我の焦くままになんでもかんでもやっておしまいるもんじゃから、どうにもならん」

(升さんの言えたことか)

と、虚子はおもった。「我の焦くままになんでもかんでもやっておしまいる」のは子規こそそうではないか。子規がひとのとめるのもきかずに大学を途中でやめたことは、松

山ではもうひとの評判であった。(以下略)

前の傍線は、前文(第二文)で登場の虚子と碧梧桐。後の傍線部は子規の松山言葉。いけんのじゃ は、いけなのだ。お の多用については、一の4子規居士追懐談で述べている。

その二 和田克司氏著「正岡子規「松山言葉四十句」

(子規会誌五九号)

(一)

明治二十九年は、子規の俳句革新運動にとっては、碧梧桐、虚子の著しい進展にともない、新たな展開を示した時であり、岡野知十の「俳諧風聞記」で評されたように、子規の新派が認知されてきた年でもあった。その「外部の印象」について「明治二十九年の俳句界」(「日本」明治三〇年一月三日)において

第一、諸新聞雑誌等に俳句を載すること

第二、諸新聞雑誌等に俳句を評論すること、

第三、俳句作者及び俳句会の増加したること、

第四、俳書の出版翻刻、俳諧専門雑誌の発行等に於て其

拡張を証せり。

と子規は述べる。本稿は、その具体例を「海南新聞」「俳句稿」を中心に、新資料を示すものである。

子規と「海南新聞」との関わりは、極堂を介して明治二十二年來、その署名記事を見ることが出来る。しかし、俳句について、子規が本格的な関与を開始するのは、子規大患後、漱石寓居愚陀仏庵に同居していた明治二十八年九月一日以降のことである。(以上冒頭文)

(一)

海南新聞が募集俳句欄を設けたのは明治二十六年一月五日からである。<sup>注1</sup>その募集広告は前年十二月十七日に始まり、選者は黒田青菱であった。以後青菱の選は明治二十八年末まで続く。

青菱は天保十一年松山生れ、旧派の宗匠として名をなしていた。没年月日は明治二十九年四月十七日、その逝去にあたり子規は海南新聞に

青菱氏を悼む

花散つて心安くも寝入りけん

の弔句を四月二十五日に掲載した。

この間注目すべきは、明治二十七年三月二十七日に新派の俳句結社として、下村牛伴の指導の下、松風会の第一回会合が持たれたことである。<sup>注2</sup>最初の新派俳句結社は、海南新聞社員であった柳原極堂(當時は磔堂と号す)の参加を得て、作品発表の場を海南新聞に得たことに特色があった。松風会の作品発表の初登場は明治二十七年十月二十一日で、以後翌年の八月二十二日まで二十五回にわたって海

南新聞に松風会俳句会の作品が掲載され、東京から子規、鳴雪の句も寄せられたのである。明治二十八年八月、子規が帰郷後漱石の愚陀仏庵に滞在し、松風会員の俳句指導にあたった結果、子規と極堂との協力によって同年九月一日より松風会の俳句が掲載されることになった。(二)の頃は以下略)とするが、この後の概要を次に記しておくこととする。

第(二)項はこの後、

海南新聞には松風会俳句と青菱選募集俳句が併存していたが、海南新聞の姿勢としては新派(青風会俳句)への肩入れが大きかったこと。

明治二十八年十二月二十二日を最後に青菱選の募集が終わったこと。

明治二十九年一月七日から「本社募集発句撰在東京正岡子規」として発表され、同年末まで一般から募集した海南新聞の俳句選は子規の手に委ねられたこと。

子規の病状の進行と多忙により明治三十年一月以後の海南新聞募集俳句は、内藤鳴雪が担当するところとなったこと。

さらにこの第二項の結びとして

すなわち明治二十九年は、子規にとって俳句革新の転機となった年であり、新派興隆の年であるとともに、海南新聞とまさに密着した年であり、「ほととぎす」誕生の母胎と

なつた年であつた。

とある。

続く第(三)は、次にそのままを引用させていただいておく。

(三)

海南新聞に全面的な協力をした明治二十九年の子規は、一方で新しい試みをいくつかしたが、その一つに「松山言葉四十句」があつた。「松山言葉四十句」は明治二十九年九月一日に海南新聞に発表されたもので、松山方言を句に生かした点でユニークであるとともに、子規の郷里松山において発表されたことに意味のあるものであつた。新資料としての「松山言葉四十句」は、春夏秋冬十句の四十句からなり、春十句の中には正月の句一句を含む。各句の松山言葉には附点があり、子規の松山への親近感を示すとともに、作者としての意図をも示していると見るべきで、松山言葉の附点は海南新聞の編集による記号とは思われぬ。

この(一)(二)の文章を私が引用させていただいた所以は、このうち(一)(二)の傍線部の和田克司氏の言にある。

つまり、明治二十九年の子規は新しい試みをいくつかしたが、その一つに、「松山言葉四十句」があり、これが子規の俳句革新運動に大きくかかわっているという氏の主張に私は大いに注目、「松山言葉」の特異性を思う時、これこそ非常なる達見であると考えたのである。

さて、「松山言葉四十句」とは、ということになるが、四十句すべてについては、子規会誌五九号に和田克司氏が書かれたものを見ていただくこととし、この後には、私が選ばせていただいた句若干に方言の解説（これまでと同じく、「伊予松山方言集」による）と、各句の季語について、一言ずつ記しておくこととする。

なお、『子規会誌五九号』にはさらに第四項、第五項として『松山言葉四十句』の性格やその成立について、詳しく解説が加えられているので、是非とも御一読いただきたい。

#### 松山言葉四十句

正月や橙投ける屋敷町

橙<sup>ニ</sup>だいたい 木にある

る限り翌年の夏にはまた緑色になるので、代代、緑の意。季語 冬

#### 参考 寒山落木卷五

#### 新年元旦

われをさなくて郷里松山にある頃友

一三人づゝ両方に分れ橙を投げあひてそを或る限りの内にとゞめ得ざりし方を負けとする遊びあり、之を橙投げとぞいへ

る。正月の一つの遊びなりけるを今はさ  
ることも絶えにけん

春風や遍路飯くふ仁王門

春風 季語・春  
遍路(ヘンロ) 松山では  
ヘンド遍途。

こまがりに刈り残されて山つゝじ

つゝじ 季語・  
春

コマガリ 小さい枝の燃料。(その次に大きいのがア

ヤギ・其の次が薪でワルキという)

例 コマガリでやらんと火がつかん。

(畑刈でたきつけないと火が薪に燃  
えつかない)

筒を四五本つけてあやぎ売

アヤギ 細い小枝の燃料。

例 アヤギをもっと入れんとツギが悪

い。(小枝のたきものをもっと入れな  
いと火のつきが悪い)

筒 季語・夏

義安寺 ギアンジボタル(ゲンジボタル) 螢の最大

なもの、原—義安寺螢

歯釜つけて飯粒沈む清水哉 — 清水 季語・夏

ハガマ(カマ)釜。原—飯釜。

例 ハガマで飯を炊く。

屋根虫を掃きおろしたる箒哉 — 虫 季語・秋

ヤネムシ 夏古い家の屋根裏に発生する毛蟲。

天窓やたま〜落つる栗の花 — 栗の花 季語・夏

テンマド(ヒキマド)引窓。(高處にあるので網で開

閉する)原—天窓。

泉屋の庄むらに蚊の鳴く夕哉 — 鮎 季語・夏

イヅミヤ 小肴(小鯛、小鯡など)を背割りにし

て骨を去り、中におから又は御飯をはさみ、  
すしのように味わう。

せんつばや野分のあとの花白し — 野分 季語・秋

センツバ(ハラン)葉蘭。

義安寺は袋ごしにもいちじるき

螢・大螢 季語・  
夏

つけたきの燃え尽きて秋のとちん飛ぶ

トチン—螢

|| 季語・夏

ツケダキ(ツケギ)付木。(薪を燃やすため火をつける薄い木片)

トチン(ホタル)螢。

五郎櫃を追ひかけて行く蜻蛉哉

蜻蛉|| 季語・秋

ゴロビツ 肴行商婦の頭に戴く桶。

しつぽくを喰ふて出づれば冬の月

冬の月|| 季語・冬

シツポク 鮠鮠の種子物たねものの一種。たねものは、てんぷら、玉子とじ など他の材料の入っている汁そば、汁うどん。

いる汁そば、汁うどん。

ゆきひらは猪か鯨か河豚汁か

河豚汁|| 季語・冬

ユキヒラ(ドナベ)土鍋。

こうした句を味わっていると、先に司馬氏の言われた「悠長なことば」は対人に対するのみでなく、草や木などすべてのものに対する接しように及んでいられると思われるのである。

(平成二五年一月例会講演 常任理事)

【訂正】

本誌140号(平成26年1月19日発行)に、次の誤りがありましたので、お詫びして訂正します。

1 表紙裏「例会案内 二月例会」

訂正前「常任理事 今村 威」

訂正後「副会長 今村 威」

2 p415 「子規と南土居の大倉 松山の永井」

訂正前「永井 市太郎」

訂正後「永井 市十郎」

【短信】 子規会花見会

四月一日(火)午前十一時三十分より石手児童公園で開催。参加者は、男子六名、女子七名の合わせて十三名。折から満開の桜の下、三段重ねのお弁当を頂きながら歓談。ビンゴゲームもあつて、参加者数はやや少ないながら盛会となり、十分に親睦を深めることができた。

【追悼】 渡部ヨシ子社長

本会理事で、二葉印刷社長の渡部ヨシ子さんが、二月二十四日午前九時三十分逝去されました。享年八十二歳。

白菊会の会員として、愛媛大学医学部に全て献体するので、お墓も造らない、葬儀もしないように、十一月一日に行われる白菊会に出席してくれば十分である、とのご本人の固い遺志により、医学部にお送りする前の僅かな時間、病室で、ご親族と入院していた病院の医療スタッフ、松山子規会のひとりとして私が参列して、極簡素なお別れの会をして、ご遺体を載せた医学部の車をお見送りしました。ご臨終は、眠るように安らかであつたとお聞きしましたが、その通りの安らかなお顔でした。

渡部ヨシ子さんには、「子規会誌」平成一〇年四月の第七七号から、出版のお世話になり、今回の平成二六年四月刊行の第一四一号が、最後のお仕事となりました。正岡子規を心から尊敬しておられたので、子規ゆかりの仕事ができることが、生き甲斐であると言われ、誠心誠意お尽くしくございました。また、陸羯南を尊敬し、青森で行われた

羯南を偲ぶ会に出席され、また、子規の友人清水則遠を愛し、編纂中の『子規事典』では、「清水則遠」の項を執筆し、推敲中でしたが、残念なことに完成をみる事が出来ませんでした。

心よりご冥福をお祈りします。

(今村威記)

子規会誌 第一四一号

季刊(四、七、一〇、一月)

発行日 平成二六年四月一九日

発行 松山子規会

松山市末広町正宗寺内

振替口座 〇一六二〇一七一八六八

印刷所 (有)一葉印刷所

電話 〇八九一九二五―〇三三八

心を  
ゆるめて  
ゆったりと

旬味あふれる会席をたのしみ  
あふれる湯にお遊びください。

 道後館

愛媛県松山市道後多幸町7-26 〒790-0841 TEL089-941-7777 FAX089-941-7707  
予約専用 ☎089-941-7782(8:45~20:00) ☎0120-10-4848(8:45~20:00) <http://www.dogokan.co.jp>

## (有) 二葉印刷所

〒791-8013 松山市山越3丁目9番12号 TEL(089) 925-0338  
FAX(089) 925-2189

松山を代表する

### 銘菓「子規」・醤油餅

松山市道後湯之町13-7

### 巴堂本舗

TEL 089(941) 3452

# 子規のすべてがここに。

子規選集 全15巻セット  
定価 58,800円



【編集委員】

粟津則雄 / 大岡信 / 長谷川權 / 和田克司

四六判 上製・カバー装(各巻368頁~768頁) 定価 3,675円~3,990円 装幀 菊地信義

本選集の特色

- 各界の第一人者によるテーマごとの新しい編集。
- 新字・新かな表記、漢文表記には読みがなを付し、読みやすいかたちで子規の言葉を味わう。
- 写真や図版を多用し、子規の世界を視覚的にとらえられるように工夫した。
- 新出書簡を可能な限り収録し、また新資料により年譜の充実をはかった。
- すべての巻に、人名について注を付す。
- 俳句・短歌の巻には初句索引を付す。

【全15巻内容】

- 第1巻 子規の三大随筆
- 第2巻 子規の青春
- 第3巻 子規と日本語
- 第4巻 子規の俳句
- 第5巻 子規の短歌
- 第6巻 子規の俳句革新
- 第7巻 子規の短歌革新
- 第8巻 子規と絵画
- 第9巻 子規と漱石
- 第10巻 子規の手紙
- 第11巻 子規の俳句分類
- 第12巻 子規の思い出
- 第13巻 子規の現在
- 第14巻 子規の一生
- 第15巻 子規と静岡

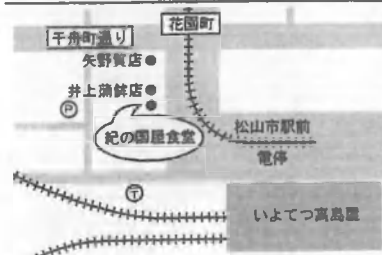
【発行】株式会社 増進会出版社

〒411-0943 静岡県駿東郡長泉町下土狩105-17  
TEL 055-973-7117

Z-KAI  
<http://www.zkai.co.jp/>

お食事処・麺処・宴会 (20名様)

## 紀の国屋食堂



瀬戸内の活き魚料理、  
ふぐ会席、猪鍋  
※宴会の予約賜ります

松山市湊町5丁目3-5  
電話 945-1309  
(日曜 定休日)